

【土中絵画】

私は20代前半でのイタリア遊学中に、自身の日本美術や日本の美意識観の乏しさを痛感し、日本に帰国の後は江戸文化・室町文化・平安文化と遡る中で、最終的に縄文文化を行き着き探究するようになりました。縄文研究の当初は、出土されたほとんどの土偶のスケッチをし、油絵で土偶そのものの形を表現していました。

ある時、その縄文土偶油絵作品を現代美術ギャラリーに持ち込んだところ、美術評論家オーナーから『この縄文土偶の絵画よりも本物の土偶の方が明らかにエネルギーがありますね』と諭された私は、縄文の形ではなく心を描くにはどうすべきであろうと思案いたしました。

縄文時代は今から1万5000年前から始まったとされ、約1万3000年に渡る文化であって、草生期・初期・中期・後期晩期と多少の土器や土偶の形態の変化はあるにせよ、1万年以上に及ぶ長きにありながら、ほとんど大きな変化のない事は世界でも稀有なる文化であったと言えます。

これは縄文人の自然への畏敬の念によって、人間は自然に内包され自然と共生するという循環の意識によって、あえてダイナミックな変化をしないという縄文人の選択であったと思っています。

縄文人の循環の意識は、実際の生活におけるものだけではなく、“あの世”との関わりの中でも存在したと考えます。実際の生活では、子供が生まれると栗の木を植え、その栗の実を煮炊きしたものを食べ、子供が成人になる頃には栗の木は大きくなっていて、成人になった子どもはその木で家を建て独立し、新しい家庭を持ったようです。

循環思想では“あの世”との関わりも重要であり、その事は出産が大きく関係していたようです。現代でも出産は全て万全ではない中、縄文時代にはかなり厳しいものであったようで、出産の際に母子ともに亡くなるケースが多かったようです。

そのような中で縄文人は、土偶という母胎を表したものとされる像を作り弔ったようです。その方法は母体の土偶を作り、あえて壊してから土中に埋めるのです。それは縄文人が、この世と“あの世”はアベコベであると考えた思想の中で、今ここで亡くなってしまった母と胎児をの土偶を作り、あえて壊して土中に埋めることで、アベコベである“あの世”では元気な姿となっていることを願うものでした。

このような循環の意識と美意識に満ちた縄文人の心を学ぶ中から、描いた絵画を土中に一定期間埋め掘り起こすという【土中絵画】と呼ぶ独自の手法を生み出し、自身の美術表現の核として30年間に渡り行なっております。

また、郷土である静岡・磐田の地には“地の神様”と呼ぶ神様の祠が家々の庭にあり、これはご先祖様が仏から神になったものであり、日本人の古思想の中に、亡くなると土に還り神様になるという伝承からの着想も加わっている事も付け加えておきます。